

内発力

2021.11.8

新しい言葉に出合った。「内発力」である。特に違和感はない。いつの頃からか、何でも「○○力」とする傾向が出てきた。授業力、人間力など、今では当たり前のように使われている。内発的ならば辞書にあるが、内発力はない。外からの刺激によらず、内からの欲求によって起きることを言う。内からの欲求によって湧き出す力である。

自らの人生を切り開いた人は皆、内発力の強い人であろう。人間国宝の講談師、一龍齋貞水さんの言葉がある。「教えてくれなきゃできないって言っている人間には、教えたってできない」銀座の鮎屋「すきやばし次郎」の主人、小野二郎さんの言葉もある。「教えてもらったことは忘れる。自分が盗んだものは忘れない」

内発力のないところに、いかなる成長もないことを、二人の先達の言葉は教えている。侍ジャパンの監督を務めた小久保裕紀さんが、イチロー選手について忘れられない思い出があると、新聞に書いていた。

小久保さんは、プロ2年目に本塁打王を獲得。だが、天狗になり、翌シーズンは散々。一方、イチロー選手は、3年連続の首位打者へ邁進中。その年のオールスターゲーム、外野を二人でランニング中に彼に聞いた。「モチベーションが下がったことないの？」すると、イチロー選手は、私の目を見つめながら、「小久保さんは数字を残すために野球やっているんですか？」と言った。

「僕は心の中に磨き上げたい石がある。それを野球を通じて輝かしたい」自分は何と恥ずかしい質問をしたのかと、顔が赤くなった。彼の一言で「野球を通じて人間力を磨く」というキーワードを得た。内発力で生きている人間の真骨頂を、このイチロー選手の言葉に見ることができる。

学校に勤務する教員はどうだろうか。可能性に満ちた子どもたちを前に、授業を行っている教員はどうであろうか。教えられることを待っている受け身の姿勢の教員はいないだろうか。先輩教員の指導技術を盗もうとしている若手はいるだろうか。教員一人一人の心の中に、磨き上げたい石はあるだろうか。

教科の専門的な知識や技能、指導技術、子どもたちの気持ちを理解しようとする姿勢などは、教員にとって必須の要件である。それにも増して求められるのが、人間性、人間的魅力、すなわち人間力であろう。

では、教員の場合は、どのようにして人間力を磨けばいいのだろうか。一つの答えがある。教員の仕事とは、直接関係のないことをするのである。読書ならば、教育書ではないものを読む。教員以外の方々と積極的に交流する。旅に出る。趣味を持つ。要するに、人間としての幅を持つということである。

そのためには、内発力が必要である。内から燃え上がるような欲求である。自分が、どんな教員になるかという前に、どんな人間になりたいか、どんな人生を送りたいかということである。教育界にも、イチローはいるのだろうか。